

語の多義性とアスペクト

今田 水穂

キーワード：アスペクト、多義性、構成性、出来事、telicity

1. はじめに

金田一(1950)の動詞分類以来、文の表す出来事のアスペクト的性質は、基本的に動詞の意味によって決定されると考えられてきた。一方では、金田一(1950)自身が既に述べているように、動詞をそのアスペクト的性質に基づいて分類しようとすると、多くの動詞が複数の類型にまたがって分類され、一意に分類することができない。それゆえ、多くの研究者は、暗黙のうちに、動詞には複数の用法があって、それによって動詞のアスペクト的性質も変化する場面があるのだと考えてきた。一方では、森山(1988)、北原(1999)、井本(2001)などのように、アスペクトは動詞ではなく動詞句のレベルで考えるべき問題であるということを強調する研究がある。しかし動詞句の意味へと向かう研究の視点は、動詞と動詞以外の要素の関係によって生じる動詞句の構成的な意味に関心を向けるあまりに、しばしば、動詞それ自体の多義性への関心がやや薄くなっているようにも見受けられる。

本稿は、語の多義性という観点から、動詞のアスペクト的性質の多様性を整理、分析する。動詞の総体的な意味と、実際に用いられる動詞トークンの意味は区別されなければならない。動詞句の意味の構成に関与するのは、実際に用いられる動詞トークンの意味である。本稿は、動詞トークンの指し示す出来事の時間的構造がどのようなものであるかについて、継続性、可算性、動的か静的かといった基準を用いて体系化し、統一的観点から説明を与える。また、それらの出来事の類型が、目的語、数量詞、「ている」といった他の言語要素とどのように関係して、動詞句の意味を構成するのかという問題について論じる。

2. 語の多義性

2.1 語の多義性

語の意味の総体を捉えるひとつの方法は、語を範疇の名前と見なすことである。範疇は、ある類似性によって関係付けられた、要素の集合である。ある語の示す範疇が、どのような要素を含むのかは、しばしば曖昧である。しかしともかく、「犬」という範疇は「犬」と呼ばれる対象の集合であり、「岩」という範疇は「岩」と呼ばれる対象の集合である。

語の意味の総体が範疇であるのに対して、実際に使用される語のトークンは、その範疇に属するような、特定、不特定のある対象を指し示す。「うちの犬は駄犬だ」と言えば、その犬は庭で寝ているある犬を指し示しているし、「警察の犬」と言えば、ある比喩的な方法

を以って、ある人間を指し示している。

名詞ばかりでなく、動詞の場合も同様である。「走る」という語の意味の総体、すなわち「走る」という範疇は、「走る」という語によって指し示し得るような、あらゆる事態の集合である。「走る」という語の範疇には、「子供が走る」「車が走る」「電気が走る」というような、様々な種類の行為や出来事が含まれる。一方、実際に使用される「走る」という語のトークンは、それらの行為や出来事の、いずれかの意味で用いられる。ある場合には、人が足で地面を蹴って移動するという行為を表すし、別の場合には、乗り物が速い速度で地面、レール、水面の上を移動するというような事態を表す。

2.2 telic な解釈と atelic な解釈

「論文を書く」という文を、我々は少なくとも二通りの意味で理解する。第一は、論文であるところの文章を書くという行為である。第二は、論文であるところの著作物を作成するという行為である。

- (1) 昨日は家で論文を書いた。
- (2) 私は夏休みを利用してその論文を書いた。

二つの解釈を、便宜的に atelic な解釈、telic な解釈と呼ぶことにする。本稿で atelic、telic という用語を用いる際には、それが現在一般的に用いられている telic、atelic という語の用い方とは、やや異なるということを強調しておかなくてはならない。本稿で atelic、telic という用語を用いる場合には、それは「単なる動作」か、「ゲシュタルト化された複合的行為」¹かの違いである。これらは、「書く」という語の可能な解釈のうちの二つであり、本稿はこれらを相対的に区別するために、一方を atelic な解釈と言い、他方を telic な解釈と言う。従って、本稿で telic、atelic という語を用いる際には、いわゆる bounded、unbounded という概念とは無関係である。本稿はまた、この atelic、telic という概念を、行為に限定せず、動詞の表す出来事一般に拡張して用いる。我々は「氷が溶ける」という文を、氷が融解するという漸進的な科学変化を表す意味で解釈する場合もあれば、氷という物体の消失の意味で解釈する場合もある。この二つの解釈に対しても、本稿は atelic な解釈、telic な解釈という呼び方をするにすることにする。

「論文を書く」という文が、二つの異なる意味で解釈されるとき、「書く」という動詞は、

¹ 木の部品の集合が「椅子」という一つのモノの資格を持つように、ある動作の連続が一つの行為としての資格を有するようになったものを、ここでは「ゲシュタルト化された複合的行為」と呼ぶ。「椅子」が、全体としてある統合的な機能を果たすために一つのモノとしての資格を有するように、ゲシュタルト化された行為も、全体としてある統合的な機能を有するがために、一つの行為として認められる。「論文を書く」の場合には、おそらく一つの著作物を生産するという目的において、一つの行為としてゲシュタルト化される。それゆえ、本稿は「論文を書く」という文のこの解釈を、telic な解釈と呼ぶ。すなわち本稿は、telic という語を、語本来の持つ「目的のある」という意味において用いる。

二つの異なる種類の行為を表す意味で用いられている。二つの行為は、それぞれ、その行為が成立したと言える時点が異なる。ある動詞トークンの表す出来事が、いつ成立したと言えるのかは、その動詞に「た」を付けることによって確認することができる。「書く」という語が atelic な意味で用いられるとき、我々は文章が一行でも書かれたならば、その時点で「論文を書いた」と言うことができる。一方、「書く」という語が telic な意味で用いられる場合には、我々は論文が完成してはじめて「論文を書いた」と言うことができるのである。

2.3 語義の拡張

「走る」という語が、足で走るという意味から、車が走るという意味に拡張する際には、ある種のメタファーが働いている。これに対して、「書く」という語が、atelic な意味から telic な意味へと拡張するとき働いているのは、事態の隣接性に基づくある種のメトニミーである。我々は、書くという行為が、第一次的には文字を書く、あるいは文章を書くという動作であり、そしてこの行為がしばしば著作物の生産という別の出来事を引き起こすのだということを、百科事典的な知識の一部として知っている。この知識は、「書く」という語の総体的な意味の一部である。我々はこの百科事典的な知識と、そこにおける事態の隣接性に基づいて、「書く」という語を、atelic な執筆という行為の意味から、telic な生産という行為の意味へと拡張する。二つの行為は、いずれも「書く」という語の表す範疇に含まれるような行為であり、我々が「書く」という語のトークンを用いるときには、これらを含むいずれかの行為を指し示す意味で用いている。

しかしながら、ある語が telic な意味で用いられる場合に、我々が一連の状況のどこからどこまでを取って、ひとつの出来事と認定するか、言い換えれば、どの時点でその出来事が成立したと言えるのかは、しばしば恣意的である。「雪だるまが溶ける」という文について考えてみよう。この文が atelic な意味で解釈される場合には、それは単に雪だるまが物質的に融解するということを意味する。一方、この文が telic な意味で解釈される場合には、それは雪だるまであるものが溶けて消滅するという意味である。しかし、このとき、我々はどの時点をもって「雪だるまが溶けた」と言うことができるのか。我々は雪だるまが雪だるまではなくなった時点をもって (telic な意味で) 「雪だるまが溶けた」と言うのであるが、それが雪だるまが半分以上溶けた段階であるのか、あるいは完全に水になった段階であるのかといった判断は、認識論上の問題であり、その様相は多様である。

3. 出来事の類型

3.1 動詞トークンの分類としての時間的類型

金田一(1950)以来、動詞はそのアスペクト的性質と関係して、様々な方法で分類されてきた。語の多義性を認め、語の総体的な意味と語のトークンの意味を区別するならば、我々は動詞のアスペクト的意味を、実際に用いられる動詞トークンの意味の一部として考えな

くてはならない。文ないし動詞句の表す出来事の時間的性質は、動詞トークンの意味と、共起する諸言語要素との意味によって決定される。ここでは、動詞トークンの意味を、その指し示す出来事の時間的性質に即して、簡単に整理する。

3.2 状態と出来事

動詞をアスペクト的性質に基づいて分類するとき、「ある」「いる」のような状態動詞は特別扱いされることが多い。奥田(1978)の「suru と site-iru の対立がない動詞」などというのは、その最たる例である。金田一(1950)は、よく知られる動詞の四分類を立てたが、それをまた次のように言い換えている。

(3) 金田一(1950: 62)

状態動詞＝状態の不変化を表わす動詞

継続動詞＝状態の一時的変化を表わす動詞

瞬間動詞＝状態の永続的变化を表わす動詞

第四種動詞＝状態の発端を表わす動詞

ここで言う変化が、奥田(1978b)らが主体変化、客体変化などと言うところの対象の変化のことではなくて、状態、ないし状況の変化であるということに注意しなくてはならない。

「歩く」という行為は対象の変化を伴わないが、しかし歩いていない状態から歩いている状態への推移という意味では、状態の変化を伴う。

状態動詞と他の動詞を、その指し示す事態の時間的構造の面において区別しなければならないことは、これらの動詞における時制の振る舞いの違いを見ても明らかであろう。「歩く」「死ぬ」のような動詞は、ひとたびその出来事が成立すれば、その時点から「歩いた」「死んだ」と言うことになるが、「ある」「いる」のような動詞は、存在し始める時点をもって「ない」から「ある」に変わることはあっても、「あった」と言うことはない。

3.3 継続と非継続

動詞トークンが状態の変化(出来事の生起)を表すとき、それによって成立した状態は、継続的である場合と非継続的である場合がある。「殴る」「ドカンと音がする」といった出来事によって生じた状態は、一瞬にして解消されるであろうし、「寝る」「死ぬ」といった出来事によって生じた状態は、一時的ないし永続的に継続し得る。

ある動詞トークンの表す出来事が、その成立した状態の継続を持つか否かの判定をすることは容易ではないが、ここでは「ている」形によって状態化することができるか否かを、仮のテストとして用いることにする。一回限りの出来事を考えた場合、「殴る」「ドカンと音がする」などは、その成立した状態を「ている」で表すことができない。これに対して、「寝る」「死ぬ」といった出来事によって成立した状態は、「ている」によって表現するこ

とができる。

(4) *殴っている。*ドカンと音がしている。(反復や経験の解釈なら可)

(5) 寝ている。死んでいる。

「殴る」のような非継続的な動作を表す動詞も、その反復の意味で用いられる場合には「ている」によって状態化される。すなわち単発の動作を表す「殴る」トークンは非継続的であるが、反復動作を表す「殴る」トークンは継続的である。Jackendoff(1990)の Process と plural Event の区別に倣って、「寝ている」のような継続を不可算的継続、「殴っている」のような継続を可算的継続と呼んでおくことにしよう。²

3.4 動的継続と静的継続

ある動詞トークンが継続的な出来事を指し示すとき、その動詞トークンの「ている」形は、その出来事の継続過程を状態化する。その出来事がどのように継続されているかによって、「ている」形は進行相と言われたり、結果相と言われたりする。

進行相、結果相という区別は、極めて主観的、恣意的なものである。我々は概ね、「殴る」「歩く」のような動作や、atelic な意味での「崩れる」「溶ける」のような漸進的変化が状態化されたものを進行相と呼び、「死ぬ」「着く」あるいは telic な意味での「崩れる」「溶ける」などの結果が状態化されたものと結果相と呼ぶ。いわば、出来事の動的な継続を進行相と呼び、出来事の静的な継続を結果相と呼んでいるのである。

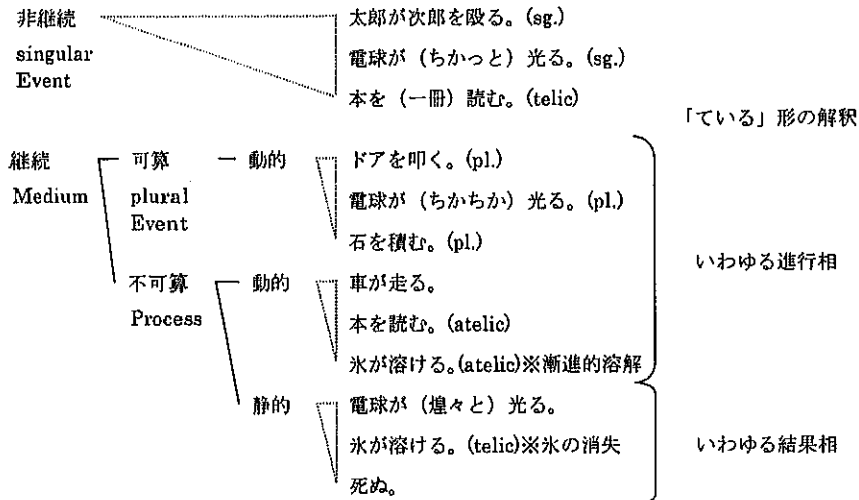
しかし、どのような出来事が動的で、どのような出来事が静的であるかは、主観的な判断に依らざるを得ない。動詞トークンの表す出来事の中には、動的とも静的ともつかないものが存在する。例えば、「椅子に座っている」は動的か静的か、「火が燃えている」は動的か静的か。こうした中間的な事例を捉えるために、我々は更に分類を精緻にすることができる。例えば、森山(1988)は動きの局面を持続的なものと一時点的なものに分け、持続的なものを過程、維持、結果持続に分類する。

しかし、どのように分類しても、常に周辺的事例は付きまとう。要するに、ある動詞トークンの指し示す出来事がどのように継続するかは、個々の動詞トークンによって多様であり、それに応じて、「ている」形の解釈も多様である。我々は必要に応じて、様々な方法で動詞トークンの指し示す出来事や、「ている」形の解釈を分類することができる。進行相、結果相という区別は、動的継続か静的継続かという直感に依拠した、典型的な解釈類型であるに過ぎない。

² Jackendoff (1990: 29)は、出来事を singular Event と Medium に分け、Medium を不可算の Process と可算的な plural Event に分けた。singular Event、Process、plural Event は、おおよそ本稿における非継続、不可算的継続、可算的継続に相当する。

3.5 解釈の曖昧性

ここまで述べてきた継続と非継続、可算と不可算、動詞と静的という二値的な素性の対立を用いて、我々は出来事を次のように類型化することができる。³



注意しなければならないのは、こうした出来事の類型が、動詞の総体的意味の類型なのではなくて、動詞トークンの指し示す出来事の類型であるということである。例えば、「本を読む」という表現は、単に本を読むという atelic な解釈と、本を一冊読み修めるという telic な解釈を持つが、前者が継続的、不可算、動詞的な行為であるのに対して、後者は非継続的な行為である（読み修めたら、それで行為は終わりである）。また、「氷が溶ける」という表現は、氷の漸進的溶解という atelic な解釈と、氷の消失という telic な解釈を持つが、前者が動的な変化の過程であるのに対して、後者は静的な結果状態として継続する⁴。それによって、「ている」で状態化できるか否か、また、できるとしてもいわゆる進行相の読みになるのか、結果相の読みになるのかが決まってくる。すなわち、「ている」が進行相と結果相の解釈を持つのは、「ている」が二義的であるからというよりは、「溶ける」が二義的なためである。どちらの場合においても「ている」は成立した出来事の動詞的、静的な継続を、状態化しているに過ぎない。

³ この分類は、相補的な二値的素性の組み合わせによって体系化されているので、理屈の上では、出来事という範疇の全体をカバーする。しかし、個々のイベントが与えられた場合に、それがこれらの区分のどこに属するかという判断は、それほど自明のものではない。

⁴ どちらも unbounded な継続過程という点では同様であり、2.2 節で telicity と bounded は異なると述べたのはこのためである。telicity は動詞の解釈の類型であり、boundedness は出来事の構造の類型である。

4. 出来事の類型と文法現象

4.1 文中の諸要素と動詞句のアスペクト

本節では、目的語や時間表現といった文中の諸要素が、動詞句のアスペクト解釈の決定に、どのように関わるかを見る。文中の諸要素の、動詞句のアスペクト解釈への影響の及ぼし方には、少なくとも二種類のものがある。その一つは、動詞トークンの持つアスペクト的な意味を構成的(compositional)な手続きによって変化させるものであり、「一時間」のような時間表現はこれにあたる。もう一つは、それが生起するか否か、生起した場合にはどのような意味で解釈されるかによって、動詞がどのような意味において用いられているか、解釈の可能性を限定するというものであり、目的語や「一時間で」のような時間表現、そしておそらく「ている」もこれにあたる。以下、目的語、時間表現、「ている」の順に、これを見ていく。

4.2 目的語の選択

文中の諸要素の関係が、動詞の意味によって決まると考える限り、それは動詞トークンの意味によって決まると考えなくてはならない。動詞の意味の拡張は、しばしば主語や目的語の選択に影響を及ぼす。よく知られるように、「塗る」という語は、対象の位置変化の意味と、それによって生じる場所の状態変化の意味の両方で用いられる。それによって、目的語の選択に変化が生じる（いわゆる壁塗り代換「ペンキを塗る」「壁を塗る」）。

「読む」という語が、単に文章を読むという意味から、本を一冊読み修めるという意味に拡張するとき、見た目上は、目的語の選択にはほとんど影響がないと言える。しかし厳密に言えば、この種の語義の拡張も、目的語の選択に影響を及ぼす。telic な意味での「読む」は、特定にせよ不特定にせよ、ある一定の量を持った文章を目的語に取らなくてはならない。一方、atelic な意味での「読む」は、一定の量を持った書物も、不特定多数の書物も目的語に取ることができる。

(6) 一般言語学講義を読む。[telic/atelic]

(7) 書物一般を読む。[atelic]

目的語の選択が、出来事の限界性に影響を与える場合があると言われる。確かに、「一般言語学講義を読む」と「書物一般を読む」では、前者の方が telic な解釈を受ける傾向が強い。しかしそれは、文脈から切り離されて「一般言語学講義を読む」という文が与えられたとき、我々はそこから一冊の本を読み修めるという状況を連想しやすいというだけのことである。実際には、すぐ上で述べたように、「一般言語学講義を読む」という文は、対象の有限性に関わらず、限界的にも非限界的にも解釈される。このことは、北原(1999:168)、三原(2002: 140)なども指摘している。

三原(2002: 140)は、目的語には [+全体的] [-全体的] の解釈があり、[+全体的] の解釈

の場合にはアスペクト限定詞として機能すると言う。しかし、本稿は、目的語をアスペクト限定詞とは見ない。三原(2002)の言う目的語の[±全体的]の解釈を決定しているのは、動詞トークンの意味である。動詞が telic な意味で用いられている場合には、目的語は全体的に解釈されるし、atelic な意味で用いられている場合には、目的語は非全体的に解釈される。⁵

すなわち、目的語が、何らかの構成的(compositional)な手続きによって、動詞トークンの表す出来事を、時間的に限定するということはない。目的語が全体的に解釈されるとき、我々はその文が telic な出来事を表しているのだと理解するが、それは推論によって、その動詞が telic な意味で用いられているのだと判断しているに過ぎない。動詞が telic な意味で解釈されるときにのみ、目的語は全体的な解釈を受けるのであるから、目的語が全体的に解釈される場合には、動詞は telic な意味で用いられているのである。⁶

4.3 数量詞

一方、「一時間」のような期間を表す表現は、出来事を時間的に限定する。「一時間」は、出来事を量化する。「一時間」によって量化される出来事は、継続的な出来事、すなわち Process か plural Event でなければならない。

- (8) *太郎が次郎を 一時間 殴った。[singular Event]
- (9) 太郎が次郎を 一時間 殴った。[plural Event]
- (10) 太郎が 一時間 遊んだ。[Process]

また、「一時間」は、ある一時的な状態が、一定の時間継続して、そして解消されることを含意する。それゆえ、「寝る」のような一時的状態は「一時間」によって量化することができるが、「死ぬ」のような永続的状态については「一時間」によって量化することができない。

- (11) 太郎が 一時間 寝た。[Process/一時的]
- (12) *太郎が 一時間 死んだ。[Process/永続的]

「気温が上がる」のような、atelic にも telic にも解釈できる表現については、「一時間」は、漸進的な変化の過程についても、結果として生じる状態の過程についても、量化を加

⁵ また、それは、動詞トークンの意味が、対象の実体と出来事の時間的過程との間にある種の写像関係を成立させるようなものである場合に限る。「気温が上がった」という文が telic ないし atelic に解釈されるとき、「気温」が何らかの意味で [+全体的] であったり [-全体的] であるということがあるのか。

⁶ 一般限量理論(generalized quantification theory)的な意味において、目的語が限量的であるということとはあり得る。しかしそれは直ちに出来事の時間的過程を限定するものではない。「三人の子供が走る」(for three x: x is a child)[x runs]というとき、その状況は何らの意味において時間的に限定されていない。

えることができる。

(13) 気温が 一時間 上がった。[Process] (atelic: 一時間上昇し続けた。)

(14) 気温が 一時間 上がった。[Process] (telic: 上昇した状態が一時間続いた。)

「論文を書く」のような表現も、atelic な解釈と telic な解釈を持つが、「一時間」で限定を加えることができるのは atelic な解釈の場合のみである。これは、telic な解釈における「論文を書く」が、継続的な出来事ではないためである。

(15) 論文を 一時間 書いた。[Process] (atelic: 論文を一時間書き続けた。)

(16) *論文を 一時間 書いた。[singular Event] (telic: 論文を一時間完成させた。)

これに対して、「一時間で」のような時間表現は、出来事を時間的に限定しない。「一時間で」は、出来事が成立するまでに要する時間を表す。従って、我々は、その出来事が成立の時点さえ持っていれば、成立した状態が継続的であるか否か、一時的であるか否かに依らず、「一時間で」によって修飾することが可能である。

(17) 一時間で ぼかんという音がした。[singular Event]

(18) 一時間で 寝た。[Process/一時的]

(19) 一時間で 死んだ。[Process/永続的]

「氷が溶ける」のように、atelic にも telic にも解釈できる表現においては、それに応じて、「一時間で」は二通りの解釈を受ける。いわゆる開始限界解釈と終了限界解釈である。

(20) 一時間で 氷が溶けた。[Process/動的(変化)] (atelic: 一時間で溶け始めた。)

(21) 一時間で 氷が溶けた。[Process/静的(結果)] (telic: 一時間で完全に溶けた。)

とはいえ、「一時間で」はいつでも自然に使えるわけではない。成立するまでに、一定の時間を要するような出来事でなければ、「一時間で」は用いにくい。それゆえ、「一時間で殴った」「一時間で遊んだ」あるいは atelic な意味での「一時間で読んだ」(読み始めた)などは、不自然である。しかし、これらの文においても、文脈を整えれば「一時間で」を自然に用いることが可能である。

(22) 気の短い太郎は、議論が始まってから 30 秒で次郎を殴った。

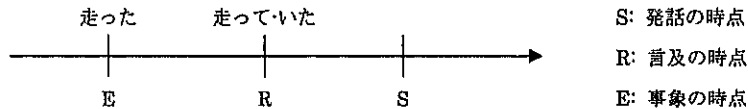
(23) その猿は実験開始から一時間でボールを使って遊び、三時間で本を読んだ。

「一時間」が出来事を時間的に限界付け、「一時間で」はそうではないということに、明示的に言及した研究者には井本(2001: 45 脚注)がいる。しかし井本(2001)がそこで「両者のこうした非対称性は指摘されたことがないと思われるが」と述べるように、両者の機能や分布が異なることは知られていながら、どのように違うのかという点については、ほとんど明示的に言及されてこなかったようである。北原(1999)はおそらく「一時間で」をアスペクト限定詞とは見なししておらず、三原(2002: 145 脚注)も北原(1999)の意見を受けて「一時間で」はアスペクト限定詞ではないと見ているが、いずれも「一時間」の機能については詳しく述べていない。本稿は、井本(2001)と同様、「一時間」はアスペクト限定詞だが、「一時間で」はそうではないと考える。「一時間」は動詞トークン（あるいは動詞句）によって表される出来事を時間的に量化する。それによって、その出来事が成立したと言える時点が変化する。これに対して、「一時間で」は出来事を時間的に限定しない。我々はただ、「一時間で」の解釈によって、動詞がいかなる意味で用いられているかを推論によって知るのみである。

4.4 「ている」形の解釈

「ている」は、出来事を状態化する。ライヘンバッハの時制構造を用いて述べるならば、「走っていた」という表現は、事象の時点 E において「走った」という出来事が成立し、その成立した出来事の継続を、言及の時点 R において、「いた」という述語を用いて状態的に捉える。

(24) 犬が走っていた。



動詞が atelic な解釈と telic な解釈を持つ場合には、それに応じて「ている」形は進行相の解釈と結果相の解釈を受ける。ただし、このとき、「ている」が、何らかの意味において、参照時点における主格の状態を述べるものでなければならないということに注意しなければならない。よく知られるように、自他対応を有する動詞においては、自動詞は「ている」形に進行相、結果相二通りの解釈を許すのに対して、他動詞は進行相の解釈が強いという傾向がある。

(25) 氷が溶けている。(進行相/結果相)

(26) 太郎が氷を溶かしている。(進行相/??結果相)

「太郎が氷を溶かしている」という文が、結果相の解釈を受けにくいのは、この文が telic

な意味において、「太郎」の状態を述べる文ではないからである。「溶かす」という語の表す出来事は、単に対象の変化というだけではなく、同時に動作主の行為で無ければならない。それゆえ、「溶かす」という語は、atelic な意味においては継続的な行為を表すが、telic な意味においては、非継続的である。「氷を溶かす」(telic)という行為は、氷が完全に溶けてしまえばそれで終わりであって、その後の状態に動作主は関与しない。我々は、動作主が「溶かす」(atelic)という行為を行っている状態を「溶かしている」(進行相)と述べることができるが、動作主が「溶かす」(telic)という行為を成立させている状態を「溶かしている」(結果相)と述べることはできない。

「溶かす」のような他動詞も、受動化すると結果相を示すことが知られる。主格が対象(theme)になるならば、我々は「溶かす」(telic)の結果生じた対象の状態を、「溶かされている」(結果相)と述べることができるようになる。

(27) 氷が溶かされている。(進行相/結果相)

杉本(2002)は、「変化動詞文において動作主が存在しない場合、結果相解釈が許される」(p. 43)という動作主不在仮説を立てる。これは変化他動詞文が受動文化した場合のみならず、次のような主格が無生物である文、経験者的である文をも射程に収めた一般化である。

(28) 地割れが村を分断している。

(29) 犯人が返り血を溶びている。

(30) 太郎が靴を脱いでいる。

(31) 山田さんが足を痛めている。

(以上杉本 2002: 43-45)

確かに、変化の結果生じた状態に、動作主が引き続き関与するという状況はあまりないので、主格が動作主である場合には、「ている」は結果相の解釈を受けにくい。ただし、結果の状態の維持に動作主が関与するような場合には、他動詞文が結果相の解釈を受ける場合もある。

(32) 太郎が荷物を持ち上げている。(進行相/結果相)

従って、単に動作主が存在したら結果相が成立しないというわけではなく、(動作主が存在する場合)動作主がその結果状態に関与的でなければ結果相は成立しないという方が適当であるように思う。

主格が動作主でなければ、こうした行為の継続性は問題とはならない。その場合にも、主格が動作主でない(28-31)の文が、いかにして、結果相の解釈を成立させるかは、説明を要する問題である。杉本(2002: 44)は、動作主不在仮説の例外として、「地割れが村を分断

している」が結果相で解釈されるのに対して、「雷が地面をえぐっている」は結果相で解釈されにくいということを指摘している。おそらく、「村を分断している」は「地割れ」の状態なのであるが、「地面をえぐっている」は「雷」の状態ではないのである。「返り血を浴びている」「靴を脱いでいる」「足を痛めている」も、何らかの意味において、「犯人」「太郎」「山田さん」の状態を述べているのであろう。しかし、この「何らかの意味で」というのを、本稿は明確に規定することができない。

「ている」形の解釈は、金田一(1950)以来、アスペクト論の中心的問題であり続けた問題である。この問題に関する一般的な解を提示するためには、我々は従来の諸研究に加えて、比較的新しい様々なアプローチ、竹沢(1991)の θ 連鎖、杉本(2002)の動作主不在仮説、又平(2001)、田川(2002)の「イチゴが売っている」構文といった諸研究との関係を明らかにしなくてはならない。この問題の詳しい検討については、他稿に譲るものとした。

5. まとめにかえて —— 既存の研究との関係

金田一(1950)は、「ている」形の解釈に基づいて、動詞を四つの類型に分類した。基本的には、辞書の項目としての動詞の分類であり、動詞トークンの分類ではない。一方では、「このように考えて来ると、二類以上の動詞を兼ねている動詞の数は非常に多く、たった一類だけの中におさめ得る動詞は非常に少ないのではないか、否、全然ないのではないか、とさえ疑われ」(p. 52)というように、動詞のアスペクト的曖昧性を明確に認識していた。奥田(1978a, b)もまたその点は同じで、*suru* と *site-iru* の対立を持つ動詞を、継続動詞と結果動詞に二分する一方で、「この *site-iru* を分類しているとき、おなじ、ひとつの動詞が (一) の意味を実現したり、(二) の意味を実現したりすることに気がつくだろう。」(p. 17)ということ、極めて明確に認識していた。奥田(1978b)はこの種の二側面性を持つ動詞を、《変化》であると同時に《動作》でもあるような動きを表す動詞と考え、「具体的な使用の中で」(p. 25)、《動作》として扱われるか、《変化》として扱われるかが決まると見なした。

1980年代後半頃から、アスペクトを動詞単独の問題としてではなく、動詞句のレベルで取り扱おうとする動きが出てきた。森山(1988)は、この立場を明確に主張する研究者の一人で、動詞と副詞的成分などとの関係の中で、アスペクト的な意味の決まり方のプロセスを考える必要性を説いた。森山(1988)は、「服を着る」のような動詞句の意味を、いくつかの局面の組み合わせから成るものと分析し(時定項分析)、それらの局面を持続的か一時点的か、継続か維持か結果持続かといった観点から一般化、類型化した。そして、「ている」の意味や、副詞的成分の機能を、それらの局面のどこにかかっているか、という観点から説明した。森山(1988)が、「服を着る」という動詞句はある出来事を表し、それはいくつかの局面から成るのだと考えるのに対して、本稿は、一般的な語の多義性の概念(*type* と *token* の区別、*token* の指示対象としての出来事)に基づいて、森山(1988)の言う局面を個々の動詞トークンの表す個々の出来事と考え、局面の組み合わせをいくつかの出来事の隣接関係(従って動詞の総体的な意味の一部)であるとする。(しかしその点を度外視すれば、分

析の方法自体は、本稿の考え方と森山(1988)の考え方には、かなり近いところがある。)

工藤(1995)は、奥田(1978a, b)の理論を基礎に、動詞を(A1)主体動作・客体変化動詞、(A2)主体動作動詞、(A3)主体変化動詞の三つに分類し、さらに、これらを限界性の概念と関係付けて、内的限界動詞(A1, A3)と非内的限界動詞(A2)とに分ける。シテイル形の解釈については、原則として、(A1)と(A2)は動作継続、(A3)は結果継続を表すと見なす。この点において、工藤(1995)は、動詞の分類と、実際の使用における意味との間に、一対一の関係を想定する傾向が窺える。一方、(A1)類の動詞であっても、無生物主語構文、再帰動詞構文、受動文などでは結果継続の解釈が現われるという現象については、ムードやヴォイスとの相関という言い方で説明し、また、非内的限界動詞においても、「駅まで」「全部」のような表現によって、外的に限界付けられる場合があることを指摘する。工藤(1995)のアスペクト論は、動詞それ自体の扱いについては、できるだけ一般化、単純化し、アスペクト的な意味の曖昧性については、動詞以外の要素が動詞本来のアスペクト的性質に影響を及ぼすという言い方で解決する方向に向いていると言えよう。

北原(1999)は、工藤(1995)までの研究と、Tenny(1994)のアスペクト限定の概念を受けて、動詞句のアスペクト的性質を構成的観点から説明しようとする。このとき、北原(1999)は、「2.5km」のような数量詞や「終点まで」のようなマデ格句の機能をアスペクト限定と言い、「30 分で」のような副詞句を Atelic な動詞句が潜在的に持つ Telic な概念を顕現させる機能を持つと言って、両者の機能を注意深く区別している。しかし、動詞については、工藤(1995)の限界動詞、非限界動詞という分類をそのまま用いていて、語それ自体の多義性の問題については、あまり関心を払っていなかった。

文中のある要素が、動詞句のアスペクトに影響を及ぼすと言うとき、そこには二つの影響の及ぼし方があるということに注意しなくてはならない。一つは、動詞トークンの表す出来事の時間的構造を、構成的な手続きによって限量する方法(いわゆるアスペクト限定)であり、「一時間」「夕方まで」などは、おそらくこれにあたる。もう一つは、その要素が生起することによって、動詞がどのような意味で用いられているかが推測されるというような、解釈の可能性を制限するという意味での影響の及ぼし方であり、本稿の考えでは、目的語の選択や「一時間で」などは、これにあたる。

北原(1999)はこの違いにほとんど気付いていながら、アスペクトの意味の変容に、構成的手続きでなされるものと、動詞それ自体の曖昧性によってなされるものがあるということを明確に区別していなかったために、Atelic な動詞句が「一時間で」という副詞句によって Telic な動詞句になることを説明するために、目的語が動詞句に潜在的限界性を与え、それを「一時間で」が顕在化させるというように、動詞句の限界性決定の原理を、やや複雑なものにしなければならなかった。同じような問題は、目的語は[+全体的]解釈のときのみ、アスペクト限定詞として機能すると述べた三原(2002)についても言える。

アスペクトの研究が、動詞句の意味の分析に向かったことは、動詞の辞書的、総体的な意味(および分類)と、実際の使用における動詞句の意味とを区別するようになったとい

う点において、アスペクト研究史上の大きな進展であった。しかし一方で、この方向でのアスペクト研究の進展は、動詞と他の言語要素との関係に関心を向けるあまりに、動詞それ自体の意味的な曖昧性に、あまり関心が払われなくなるという状況を生み出した。実際には、動詞句のアスペクト的性質を決定するのは、統語的、構成的な意味演算の手続きと、語それ自体の意味解釈の双方である。我々は、この二つを注意深く区別し、その両面からアスペクトの研究を推し進めていかなくてはならない。

【参考文献】

- 井本亮(2001)「日本語動詞文における「有界性」の有効性—意味的要件としての複数性をめぐって—」『筑波日本語研究』6, pp. 42-60, 筑波大学.
- 奥田靖雄(1978a)「アスペクトの研究をめぐって (上)」『教育国語』53, pp. 33-44.
- 奥田靖雄(1978b)「アスペクトの研究をめぐって (下)」『教育国語』54, pp. 14-27.
- 北原博雄(1999)「日本語における動詞句の限界性の決定要因—対格名詞句が存在する動詞句のアスペクト論—」黒田成幸・中村捷(編)『ことばの核と周辺—日本語と英語の間—』pp. 163-200, くろしお出版.
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15, pp. 48-63.
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房.
- 杉本武(1988)「動詞+テイル」の表すアスペクトについて」『論集 ことば』刊行会(編)『論集 ことば』pp. 101-115, 『論集 ことば』刊行会(くろしお出版).
- 杉本武(2002)「『ている』形の解釈と動作主性について」『文藝言語研究』42, pp. 37-50, 筑波大学.
- 田川拓海(2002)「擬似自動詞文の派生について—「イチゴが売っている」という表現—」『筑波応用言語学研究』9, pp. 15-28, 筑波大学.
- 竹沢幸一(1991)「受動文、能格文、分離不可能所有構文と「ている」の解釈」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』pp. 59-81, くろしお出版.
- 又平恵美子(2001)「「イチゴが売っている」という表現」『筑波日本語研究』6, pp. 93-102, 筑波大学.
- 三原健一(2002)「動詞類型とアスペクト限定」『日本語文法』2-1, pp. 132-152.
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院.
- ライヘンバッハ, H.(著), 石本新(訳), (1982)『記号論理学の原理』大修館書店. (原著 Hans Reichenbach, *Elements of Symbolic Logic*, 1947, New York: Macmillan.)
- Jackendoff, Ray(1990). *Semantic Structures*. MIT Press.
- Jackendoff, Ray(1991). Parts and Boundaries. *Cognition* 41.
- Jackendoff, Ray(1996) The Proper Treatment of Measuring Out, Telicity, and Perhaps even Quantification in English. *Natural Language and Linguistic Theory* 14.
- Tenny, Carol L.(1994). *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Dordrecht: Kluwer.